

ロンドンエッセイ　6

小野 あずさ

イギリスの照明家

つまらないお話かもしれませんが、英国照明家協会が提示する舞台照明家のデザイン料は以下のようになります。手引きを参照すると1公演／ウエストエンド有名ミュージカルで高くて約350万円、ウエストエンドミュージカルで低くて約170万円、演劇で約51万円。これらはすべて著作権使用料(週2.5万円ほどか、チケット売り上げの約0.5%) が上乗せされます。オペラ(大型オペラハウス)で約130万円、オペラ(中型)で約78万円、オペラ(小型)で約52万円、国立や地方の大きな劇場での公演で約69万円、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで約80万円、ツアー公演で約41万円、ウエストエンド外(OFF SOLT)のミュージカルで約95万円、OFF SOLT演劇で約43万円、OFF SOLT小さなスケールの演劇で約26万円、フリンジ(ミニ劇場、パブ劇場等)で約17万円(フリンジの場合、現実はこの半分以下が普通) です。

この国で、照明家とてして沢山稼いでいるのは、おそらく10本の指に収まる大物だけでしょう。海外の名の知れた照明家さんたちも、イギリスでお仕事をされるので、無名の照明家に来る仕事は限られています。ですので、照明デザインのお仕事が回ってくると、どんな演目でも心が踊るのは私だけではないと思います。やりたい演目を選べるようになるまでは、やはり時間がかかります。予算と時間が許す限り、回ってきた仕事は演目の種類に関係なく、今後の自分の栄養になると考えて、引き受けていきます。「展示会ですか?はい、やらせて頂きます。」「オペラですか?はい、楽譜を読めるようにしておきます。」「舞踏ですか?はい、即興でやらせて頂きます。」「ゲイ・キャバレーですか?はい、水着で参ります。」という具合です。

イギリスの照明家の中で特にすごいのは女性群です。イギリスで今、一番人気の照明デザイナー、ポーラ・コンスタブルさん(女性であるがマシュー・ボーン振付の作品『眠りの森の美女』などのデザインを行っています。) は、幼いお子様の面倒を見ながら、ウエストエンドやオペラの公演を次々に手掛けています。勿論、旦那様の助けも大きいようですが、彼女の仕事ぶりは見事なものです。その他にも子育てをしながら活動している、何名かの女性照明家を目にします。そんな彼女らの後ろ姿を見ていると、自分はとても勇気づけられます。

皆様もご存知のとおり、ヨーロピアンは休日を大事にします。普通のビジネスマンは土、日は大体お休みのようです。しかし、私たち舞台人は週末にお休みという習慣がもてないので、休めるときはとことん休む、完全に仕事からスイッチ・オフできる日をもつことを大事にしています。イギリスに来た当時は、この習慣を目にし、羨ましさも感じましたが、レイジー(怠惰) なのね、とも思っていました。しかし、慣れてみると、仕事と私生活のバランスを、とても大事にしている文化だな、と思うようになりました。「働くために生きる」のではなく、「生きるために働く」人たちを目の当たりにした感じです。

現場では現場だけに集中し、自分のベストを発揮する。家にはなるべく仕事をもち帰らず、自分と家族のためだけに時間を過ごす。当たり前のことかも知れませんが、意外と現代人の忘れがちな部分なのかもしれません。

仕事と私生活の区別とバランスがあるからこそ、生き生きと仕事ができるし、自分をいろいろな角度から盛り上げられるのではないかと思います。

そのように生きている人たちは、人も自分もしっかりケアできた上で、人生の楽しみ方を知っているという感じで、いくら忙しくても、充実感が顔から滲み出ています。

